

# 近代教育制度の中の暗誦

——法令面の変遷を軸として——

小金澤 豊

## 一 はじめに

「暗誦」とは「暗記した学習材料を口述的形式で再生すること」とある。「記憶を重視する教授法では、その意味が理解されているといないとを問わず、学習材料を忠実に再生できるようにすることを目標」にしてい、かつては「講義法と並んでもっとも主要な教授法の一」であった。しかし、「理解、生産的思考の無視、生徒の要求・個性的要求の無視、自主的・創造的精神を養成する機会が与えられない」<sup>(1)</sup>などの観点から、現代の教育界では批判の対象となる学習法の一つとなっている。

しかし、かつての我が国では暗誦が奨励され、暗誦による知識が裏付けとなった教養というものが知的基盤として重んじられる時代が長く続いた。明治以来、「国語及漢文」科では、暗誦が教育カリキュラムの中に明確に位置付けられており、学校教育の中ではそれに基づいての教育が行われていた。それどころか、当時においては、読書の形態そのものが音読を

するといふものであり、声に出して読んだ結果として、自然に本文までもを覚えこんでしまうということになったのである。いったい暗誦教育というものは、それほど批判の対象とされるものなのであるか。学力低下が叫ばれる今日にあって、江戸後期から明治、大正、昭和の戦前、戦後期を通して暗誦というものがどのように位置付けられ、変化してきたかについて、主に法令面を中心にしながら、その変遷をたどることにする。

## 二 佐藤一斉における暗誦

今、佐藤一斉を取り上げるのは、次の理由によるものである。

すなわち、当時幕府公認の学であるところの林家に学んだという彼の経歴が、まず挙げられる。はじめは陽明学を学んだものの、後には林氏の門に入ることになる。

寛政五年の四月に述齋は幕命によりて林家を相続したりき。時に述齋は年二十六。一齋二十二なり。是に於て始めて師弟の名を正し、日夜同学すること猶旧時の如くしてして、心を六経に潜め傍ら文辞を学べり。<sup>(2)</sup>

この林述齋が林家を継承した事情について、高瀬代次郎は次のように説明している。

林家第七代の錦峯早世して子なく、羅山の血統が絶えた。かくて寛政五年、美濃の岩村の城主松平乗蘊の第二子、幕府の命によつて林家を相続し、大学頭に任じ、衡と称した。時に二十六にして、述齋と號した。<sup>(3)</sup>

林衡が岩村城主の血統であることは、一斉との関係を考える上で重要である。なぜなら、一斉は、安永元年に江戸の岩村藩邸で生まれているからである。

ともあれ、一斉は林家の塾において学ぶうちに頭角を表すようになり、ついには、幕府の儒官の中心的存在となるにいたった。

林衡の卒するや幕府は其の高弟一齋佐藤捨蔵を挙げて儒官とし教官役宅に居らしめた。一齋時に七十歳、決然として後進誘掖の任に当った。天下之を仰いで山斗とし其門に入る者三千に達した。<sup>(4)</sup>

このように、幕府の正統たる学問の場に身を置いた一斉の立場は、当時において大いに尊重されたものであるといえる。次に、一斉には多彩な弟子が大勢輩出したということにふれる。先に「其門に入る者三千に達した」とあったが、数ばかりでなく、その門弟たちの質についても、広く社会的な影響力を持った者たちが多かったということが注目される。

高瀬代次郎は、その著書の中で「佐藤一齋の門人」という項を置き、次の人物の紹介をしている。<sup>(5)</sup>すなわち、鎌原桐山、竹村悔齋、安積良齋、昌谷精溪、大島松洲、氏家緑山、渡邊華山、吉村秋陽、吉村斐山、菊池幽軒、岡永蘭洲、三谷慎齋、澤村西陂、川路聖謨、永山二水、山田方谷、林鶴梁、横井小楠、奥宮慥齋、佐久間象山、若山勿堂、丹羽瀬格庵、田邊恕亭、長戸得齋、池田草庵、柳澤芝陵、大橋訥庵、嶺田楓江、中島操存齋、金子得所、楠本端山、楠本碩水、木下犀潭、牧野黙庵、東澤鴻、中村敬宇、国分鶴村、岡谷繁實、倉田何庵、春日潜庵である。

また、安積良齋における重野成齋、山田方谷における三島中洲というように、これらの人物の中にはさらに著名な弟子を抱える者があり、そう考えると、一斉にとっては孫弟子にあたる代まで学統が連なりを見せるわけであり、その影響力

の大きさははかりしれないものがあると言える。

このように大きな影響力を持った存在である一斉には、漢学学習法についての著述があることは、神辺靖光の論著にも次のように紹介されているとおりである。

漢学の学習法は江戸時代から多くの儒者によって工夫され、吟味され、改善されて明治に至った。学習法についての著作には江村北海の「授業編」、佐藤一斉の「初学課業次第」がある。<sup>(6)</sup>

『佐藤一斎全集』の解説によれば、この「初学課業次第」の内容は次のようなものである。

読書の方法については、素読より始め、教師の講釈があり、師立ち合いのもとに諸生会読をし、次に独学を主とするも、不審箇所はその解明を師に求め、あるいは朋友相寄りて解明に努める。更に深奥を究めんとする者には、経部、史部、子部、集部にそれぞれ書目を挙げている。初学諸生のためとはいえ、その書目は相当の量に上る。しかもこの書目で十分というのではなく、他にも読むべきものが多くあり、各能力に応じて学ぶことを望んでいるのである。<sup>(7)</sup>

「初学課業次第」には、経史子集の四部それぞれに初学の者が読むべき書物を多数紹介しているが、これらの書物をただ読みさえすればそれでよしとしているのではない。読むことの前提として、テキストの暗誦がある。そのことは、「初学課業次第」本文冒頭の「素読」の項の、こんな箇所からもうかがい知ることができる。

兎角習読して、暗誦する程に至るべし。然らざれば、「五經」終れども独看出来難きなり。<sup>(8)</sup>

テキストの本文を何回も何回も読んで、ついには暗誦するまでにならなければ、「独看」、つまり、自分ひとりで漢籍を読む学力は身につかないというのである。そして、一斉はこの「初学課業次第」で、最初の「素読」の項に続けて「独看」という項を設け、ひとりで読むのに適当な漢籍を掲げている。

また、一斉には他に「課蒙背誦」という著作がある。これは著作といっても「二十五枚の小本」であり、「童蒙の暗誦すべき必須基礎知識の意」<sup>(9)</sup>というほどのものである。

その内容については、高瀬代次郎の解説が大変にわかりやすい。

是れ天文、数学、和漢の地理、歴史、和歌、詩文等を学習する兒童に課するに、其の予備的知識を以てせんが為に著したるものにて、多くは名数を挙示したるに過ぎざれども、皇学を尊び国史を重んじたることをも明にするに足る。<sup>(10)</sup>

「課蒙背誦」は、たとえば、「兩儀」として「陰陽」を。「二親」として「父母」を。「三才」として「天地人」を。などという具合に、数に合わせながらその意味するところを挙げていく形式で著わされており、他にも「四声」として「平、上、去、入」を。「五行」として「木、火、土、金、水」を。「六芸」として「礼、樂、射、御、書、数」を。「七情」として「喜、怒、哀、樂、愛、惡、欲」を、というように漢籍を読む上で必要となる事柄を確認できるように構成されている。

これは中国の事柄のみならず、「和歌三代集」として「古今、後撰、拾遺」を。「六国史」として「日本紀」「続日本紀」「日本後紀」「続日本後紀」「文徳実録」「三代実録」などのように、日本の事柄についても挙げており、「五十字母」つまりアイウエオで始まる五十音で終わっている。

これら暗記すべき事柄は、童蒙にだけ勧めるものではなく、当の佐藤一斉自身もおびただしい漢籍を暗誦できたが、ここにそれを証明する証言がある。

横浜に現住せる市河得庵翁は本年八十六歳の高齢にして一齋の晩年の門人なるが、著者に語りて曰く「一齋先生は晩年に腰がまがりたり。視力は終りに少し眼鏡を使用せらりしのみにて、左程にもあらざりしが、聴覚は著しく衰え居たり。何か質問すれば新九郎〔三男立軒〕にきけ新九郎にきけと申されたり。然し経書は固より暗誦し居られたれば、講義は極めて明瞭にして其の講義を終りて後には大成殿でも見てこようかと申されたり云々」経学文章を以て長生涯を一貫したる一齋の老後を見るべき也。<sup>(11)</sup>

右のような「経書は固より暗誦し居られたれば」という証言からもわかるように、当時の学問というものは、おびただしい知識の暗誦の上に成り立っていたものなのである。

### 三 近代教育の中の暗誦

江戸時代に学問所や寺子屋で行われていた漢文の素読というものが、明治になって以降、学校制度が徐々に整備されていく中であって、どのように形を変えながら組み込まれていったか。そのあたりの様子について、教育制度の変遷に照ら

し合わせながら確認していく。

学制発布の年である明治五年に出された「小学教則」には、「単語読方〔コトバノヨミカタ〕』という指導項目を掲げて、これにあてる指導時間数を「一週六字即一日一字」と規定している。

そして、その内容について、次のように記している。

童蒙必単語篇等ヲ授ケ兼テ其語ヲ盤上ニ記シ訓読ヲ高唱シ生徒一同之ニ準誦セシメ而シテ後其意義授ク但日々前日ノ分ヲ暗誦シ来ラシム

当時の教授法は、まず教師が単語を書きながらこれを高らかに訓読していき、それに続いて生徒も声を出しながら後に続いていく。意味の解説はそれから行ったということである。そして、前日に学習した内容については必ず暗誦してくることが課せられていた。

また、これと平行して「単語暗誦〔コトバノソラヨミ〕』という項目が、「一週四字」あった。

一人ツツ直立シ前日ヨリ学フ処ヲ暗誦セシメ或ハ之ヲ盤上ニ記サシム

前日に学んだ箇所を一人ずつ直立しながら暗誦したり、盤上にそのまま記したりして、学習内容の定着度合いを確認したというのである。

翌明治六年に出された「小学教則」では、時間数に変化が生じてくる。

「単語読方」の指導時間数は、明治五年には「一週六字即一日一字」であったが、明治六年になると「一週四時」に時間数が減少し、「単語暗誦」の方についても、明治五年には「一週四字」であったのに対して、明治六年になると「一週二時一日置ニ一時」というように減少するようになる。

なお、この明治六年より、これまで「字」と表記してきた指導時間数を、以後は「時」に改めるようになった。<sup>(12)</sup>

明治十四年（一八八二）の「小学校教則綱領」には、「読書」という科を設けて「読書ヲ分テ読方及作文トス」という規定がなされている。内容の説明には次のようにある。

初等科ノ読方ハ伊呂波、五十音、濁音、次清音、仮名ノ単語、短句ヨリ始メテ仮名交り文ノ読本ニ入り兼テ読本  
中緊要ノ字句ヲ書取ラシメ詳ニ之ヲ理会セシムルコトヲ務ムヘシ中等科ニ於テハ近易ノ漢文ノ読本若クハ稍高尚  
ノ仮名交り文ノ読本ヲ授ケ高等科ニ至テハ漢文ノ読本若クハ高尚ノ仮名交り文ノ読本ヲ授クヘシ凡読本ハ文体雅  
馴ニシテ学術上ノ益アル記事或ハ生徒ノ心意ヲ愉ハシムヘキ文意ヲ包有スルモノヲ選用スヘク之ヲ授クルニ当テ  
ハ読法、字義、句意、章意、句ノ変化等ヲ理会セシムルコトヲ旨トスヘシ

ここでは、「漢文」という言葉が、中等科と高等科において表れてくる。すなわち、中等科では「近易ノ漢文ノ読本」、高等科にあつては「漢文ノ読本」を授けることとなっており、ここでは「近易ノ」という形容がとれている。

これまでの教育令に変わって、学校ごとの学校令が出されたのが明治十九年（一八八六）のことである。明治になって



まもなくの学制から、それを廃して明治十二年（一八七九）に出された教育令を経て学校令に至る過程は、我が国の近代教育制度の流れそのものである。

つづいて、明治十九年（一八八六）に出された「小学校ノ学科及其程度」の記述を見ていく。「読書」の内容として、次のような記載がある。

尋常小学校ニ於テハ仮名ノ単語短句簡易ナル漢字交リノ短句及地理歴史理科ノ事項ヲ交ヘタル漢字交リ文高等小  
学科ニ於テハ稍之ヨリ高キ漢字交リ文

明治三十三年（一九〇〇）には「小学校令」が改正されて、

尋常小学校ノ教科目ハ修身、国語、算術、体操トス

というように科目の規定がなされ、「読書」から「国語」への移行がみられる。

また、中学校教育に目を移すと、明治十九年（一八八六）、中学校令の後に出了れた「尋常中学校ノ学科及其程度」では、「国語及漢文」科の学習内容として、次のようにある。

漢字交リ文及漢文ノ講読書取作文

ただこれだけの記述である。その具体的な内容については、明治三十五年（一九〇二）の「中学校教授要目」まで待たなくてはならない。

その「中学校教授要目」の「国語及漢文」科の項目には、中学校において指導すべき事柄が学年別にくわしく載せられていて、その後の学校教育の方向性を示している。今、この「教授要目」にしたがって、当時の学校における漢文教育の様子を眺めていく。

「国語及漢文」科の内容は、

講読

講読の材料

文法及作文

習字

というように、大きく四部門に分けられている。そして、「講読」の項目がさらに細かく

読方

解釈

暗誦

の三つに細分化されている。つまり「暗誦」という項目が、教育内容の中にはっきりと位置づけられていたのである。

この「中学校教授要目」は、八年後の明治四十四年に内容に改正が加えられている。それによると、「国語及漢文」科の中で、これまでただ「講読」とだけされていた内容を「国語講読」「漢文講読」に大きく二分して、

国語及漢文ヲ国語講読・漢文講読・作文・文法及習字ノ五分科トス

と改めて規定しているところが、まず目に付く。では、「暗誦」についてはどのような変化が見られるだろうか。以下、この明治四十四年の「中学校教授要目」の中での「暗誦」の扱いについて見ていく。

第一学年の「漢文講読」中の「読方及解釈」の項目には、

成ルヘク国語ノ法則ニ從ヒテ誦読セシメ文字ノ字画・用法ニ注意セシメ且口語ト密接シテ語句・文章ノ意義ヲ領得セシムヘシ

とある。そして、続く第二学年には「暗誦」の項目を置いて、

隨時適當ナル章句・文章及格言等ヲ暗誦セシムヘシ

となっている。そして、第三学年、第四学年、第五学年はいずれも、

前学年ニ準ス

となっている。

この明治四十四年の改正を経た「中学校教授要目」は、その後、内容的に大きな改革はないままに大正期を経て昭和期に入る。昭和期では、戦争の影響等もあって、教育制度の枠組み自体も変化していく。これまでの「国語及漢文」科の「及」がなくなったのは、昭和六年の「中学校令施行規則」の改正によるものである。

また、昭和十八年の「中等学校令」では、「中等学校ノ修業年限ハ四年トス」と、これまでの五年よりも一年少ない年数になるという変化があった。

昭和六年には、文部省訓令第五号が時の文部大臣田中隆三の名前で出され、「明治四十四年文部省訓令第十五号中学校教授要目左ノ通改正ス」として、「国語漢文科」についても、「国語漢文ハ国語講読・漢文講読・作文・文法及習字ヲ課スルモノトス」とあり、「漢文講読」については次のような記載になっている。

漢文講読ハ読方及解釈・暗誦ヲ課シ其ノ材料ハ国語講読ノ場合ニ準ズ而シテ邦人ノ著作ニ係ルモノヲ主トシ更ニ徳

## 教ニ関係深キ漢籍中ヨリ之ヲ選ブベシ

このように、「暗誦」が「漢文講読」の中で必ず実施されなければならない事項のひとつとして明文化されている。また、ここでは、「邦人ノ著作ニ係ルモノヲ主トシ」というところが強調され、当時の時勢の影響がうかがえる。「其ノ材料ハ国語講読ノ場合ニ準ズ」とあるが、「国語講読」の文言は次のとおりである。

国語講読ハ読方及解釈、話方・暗誦・書取ヲ課シ其ノ材料ハ総テ文章ノ模範タリ而シテ国体ノ精華、民俗ノ美風、賢哲ノ言行等ヲ叙シ以テ健全ナル思想、醇美ナル国民性ヲ涵養スルニ足ルモノ、文芸ノ趣味ニ富ミテ心情ヲ高雅ナラシムルモノ、日常ノ生活ニ裨益アリ常識ヲ養成スルニ足ルモノ等タルヘシ

右の文言からは、戦時体制に向かおうとする当時のわが国の教育体制が髣髴とさせられるが、本稿ではそうした部分には言及しない。ただ、「国語講読」でも「暗誦」が課せられていたことに注目していきたい。

昭和十二年には「中学校教授要目」はさらに改正され、「国語漢文」科の「漢文講読」の項目は、つぎのような記載になる。

漢文講読ハ読方解釈、暗誦ヲ課シ其ノ材料ハ邦人ノ著作及漢籍中ヨリ平易雅馴ナルモノヲ選ビ我が国ノ徳教ニ関係アルモノヲ主トシ文学趣味ノ涵養ニ資スベキ詩文ヲ加フベシ

ここでは邦人の文章を教材テキストとすることがより一層強調されている印象を受けるが、やはり「暗誦ヲ課シ」という表現が見られる。

このように、明治期から昭和戦前期にいたるまで、学校教育の中では文章の読解というものは「暗誦」の上に成り立っていたものであった。「暗誦」という裏づけがあつてこそ、文章の読解もまた深まりを見せたのである。

#### 四 戦後の学習指導要領から

昭和の戦後期に入ると、学校制度は一新され、教育内容についても、「学習指導要領」に基づいた教育が展開されるようになった。以下、「学習指導要領」の記述にしたがつて、戦後の漢文教育について見ていくことにする。

昭和二十六年（一九五二）に出された「中学校・高等学校学習指導要領国語科編（試案）」では、その第七章に「国語科における漢文の学習指導」が設けられている。その中の「五 漢文指導の段階」には、中学校・高等学校それぞれの生徒の発達段階を考慮しながら、学習指導上生徒に要求すべき点として、次のような事項が挙げられている。

##### 〔一〕 中学校

- 1 漢和字書が活用できる。
- 2 漢字・漢語の使用法を身につける。
- 3 漢文口調の文章が読める。
- 4 日本人に親しまれている漢詩がだいたいわかる。

5 日本人がよく使う格言・故事の意味がわかる。

6 漢字・漢語・漢文の国語・国文学や日本文化に及ぼした影響を理解する。

## （二）高等学校

1 訓点のつけ方がわかる。

2 訓点のついた漢文が読める。

3 漢語・漢文の構造がわかる。

4 漢文の文体や漢詩の形がだいたいわかる。

5 漢文の文章や詩の鑑賞ができる。

6 漢語・漢文が国語・国文学に及ぼした影響を正しく理解する。

7 漢語・漢文が文化に及ぼした影響を正しく理解する。

この記述からは、生徒が漢文に対して「読める」「わかる」「鑑賞ができる」ことを目指した内容になっていることがわかる。明治期から昭和戦前期にかけて、あれほど強調されてきた「暗誦」に類する項目は、皆無である。わずかに、「六漢文指導上の注意」の「12 資料によっては、朗読・朗吟によって、漢文口調を味わわせ、生徒の興味を起こさせてもよい。」という箇所、文章を声に出して読む指導について言及がなされている程度である。

この後、昭和三十六年（一九六一）の「高等学校学習指導要領第二章第一節国語」では、「古典甲」の「1、目標」には、

古典としての古文や漢文について、概観的な理解を得させ、読解し鑑賞する能力を養い、思考力・批判力を伸ばし、心情を豊かにする。

ということが掲げられている。いったい、ここで言う「概観的理解」とはどのような程度を指すのであろうか。続く「2 内容」の「3 指導計画作成および指導上の留意事項」には、「中学校の基礎の上に、古典としての古文や漢文について平易に学習をさせ」ながら「概観的理解」を得させるように指導することが明記されている。

また、「古典乙Ⅰ」の「2 内容」の「備考」には、

ウ 専門的、特殊的な教材を選んだり、指導を行ったり、しないようにする。

エ 漢字学習の負担が過重にならないようにし、また、訓読などについては、文語文法などとの関連に注意して無理のないように指導する。

とある。

さらに「古典乙Ⅱ」の「2 内容」の「備考」にも、

ア 専門的、特殊な教材を選んだり、指導を行ったり、しないようにする。

なお、白文の読解や復文の練習は原則として行わないものとする。



という記述がある。ここでも「専門的・特殊的」な教材の使用が戒められており、何よりも、昭和戦前期までの教科書にはごく普通にテキスト本文の末尾などに組み込まれていた、復文の練習が禁止されていることが注目される。復文とは、漢字仮名まじりの書き下し文を、指定された文字数による白文に復元する作業で、漢文の作文力を養うものとして広く行われていたものである。初歩的な簡単な復文の例題では、返り点が不要の文も出題されているが、より多く返り点が施されたものをもとの文に直すには、文そのものを暗記している必要があった。このような復文練習が禁じられたということは、その背景となる文章の暗記や暗誦が行われなくなったことをも意味していると考えてよい。そして、当然のことながら、漢文による文章も作られなくなってしまった。

平成元年（一九八九）の「高等学校学習指導要領第二章第一節国語」では、「古典Ⅰ」の「1 目標」が、

古典としての古文と漢文を読解し鑑賞する能力を養うとともに、ものの見方、感じ方、考え方を広くし、古典に親しむことによって人生を豊かにする態度を育てる。

となっており、「古典Ⅱ」の目標は、

古典としての古文と漢文を読解し鑑賞する能力を高めるとともに、ものの見方、感じ方、考え方を深め、古典に親しむことによって人生を豊かにする態度を育てる。

となっている。ここでは、古文と漢文の「読解し鑑賞する能力」を身に着けることが目標となっているわけである。そして、「内容の取扱い」では、「教材は、親しみやすく基本的なもの」を選定することを配慮すべきこととして書かれている。また、「古典講読」の「2 内容」には、

ア 音読、朗読を通して作品の読解、鑑賞を深めること。

とあり、「音読」「朗読」について触れられているが、ここではあくまでも「読解」「鑑賞」の手段としての「音読」「朗読」ということにとどまっており、文章を暗記するまで声に出して読むという意味は含まれていない。

ここで、中学校の状況について見ていく。「学習指導要領」の記載を見ると、中学校の漢文学習については、高等学校に比べて著しく見劣りがする。

例えば、昭和三十四年（一九五九）の「中学校学習指導要領第二章第一節国語」には、漢文という文字すら見られない。古典に言及してある箇所は、「第三 指導計画作成および学習指導の方針」の項に「古典については、基本的なものに適宜触れさせ、古典に対する関心をもたせるように留意する。」「文語のきまりについては、取り扱う文語文を読むのに必要があれば触れる程度にとどめる。」とあるにすぎない。

昭和四十五年（一九七五）の「中学校学習指導要領第二章第一節国語」では、「第3 指導計画の作成と各学年にわたる内容の取扱い」の留意事項に「漢文においては書き下し文を併用するなどくふうするようにすること。なお、文語や訓点のきまりについては、教材を読むのに必要があれば触れる程度にとどめること。」とあり、前掲の昭和三十四年のものと

大差ない。

昭和五十三年（一九七八）の「中学校学習指導要領第二章第一節国語」の

「第3 指導計画の作成と各学年にわたる内容の取り扱い」では、「原文は親しみやすく平易なものを選ぶようにし、それをよく理解させるために、現代語訳や注釈をつけ、漢文においては書き下し文を併用するなどくふうするようにすること。なお、文語や訓点のきまりについては、教材を読むのに必要があれば触れる程度にとどめること。」となっている。「触れる程度にとどめる」指導でよしとしている点の「とどめる」という言葉遣いからは、「それ以上扱う必要はない」「扱うべきでない」という意味合いが含まれるように受け取れる。事実上の制限、ないしは禁止事項ということになる。

平成元年（一九八九）の「中学校学習指導要領第二章第一節国語」の「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」に「古典としての古文や漢文を理解する基礎を養い古典に親しむ態度を育てるとともに、我が国の文化や伝統について感心を深めるようにすること」を指導するとあり、そのために、「古典に関心をもたせるように書いた文章、易しい文語文や格言・故事成語、親しみやすい古典の文章などを発達段階に即して適宜用いるようにすること。なお、指導に当たっては、音読などを通して文章の内容や優れた表現を味わうことができるようにすること。」とある。ここには、「音読」という言葉が出てくるが、この言葉には、当然のことながら、かつて広く行われていた「暗誦」の意味は含まれていない。教材テキストに書かれている文章をそのまま声に出して読むことについて言ったものである。

こうして戦後の「学習指導要領」の記述を眺めていくと、教材については明治期から昭和戦前期までに見られた具体的な記述はまったく見られなくなっている。「専門的、特殊にならないように」ということが挙げられていて、生徒にとって何が必要なのか、何を教えるべきであるのか、ということについては一切ふれられていないのである。

## 五 おわりに

このように明治の「教授要目」から戦後の「学習指導要領」まで、主に「暗誦」の項目と教材としてふさわしいものに何が挙げられているかについての変遷を見ていくと、漢文教材を読むことの内容自体が大きな変化をしながら今日まで至っていることがわかる。明治期から昭和戦前期までの読むことの指導には、必ず「暗誦」が含まれていた。「暗誦」についての指導上の位置づけが明確になされていたわけである。ところが戦後になって、「学習指導要領」から「暗誦」という項目ははずされ、指導すべき教材や指導内容についても「過重負担」を避けてきた。それは、「平易」「簡易」「親しみやすさ」を求めた結果のことである。

先に見た江戸後期の佐藤一斎の学問がわが国近世の学問の頂点、到達点だとすれば、明治以降、「暗誦」という部分に限って見れば、明確に教育カリキュラムの中に組み込まれて位置付けられてきたものが、昭和戦後期を境に一気に崩壊の途をたどったという感が否めないのである。また、教材の選定に関しても、明治三十五年の「中学校教授要目」以来、徐々に「簡易」「平易」なものを選ぶという姿勢は見られたのだが、戦後になってこの傾向が加速度的に増して、「親しみやすく基本的なもの」ということが前面に押し出されてきたのである。そして、教材本文の暗誦は、わが国の伝統的な学習方法のひとつであった。それが、「生徒が自ら考える」ということだけに照らして批判の対象でしなくなっているような現状はいかなるものであろうか。

そして、一番肝心な、生徒にとって何が必要なのか、何を教えるべきなのかといったことが不問にされたまま、いたずらに「親しみやすさ」ばかりが強調されてしまうことが危惧されるのである。

以上見たように、かつて漢文は、我が国の中心的な学問であった。それが、見る影もないほどに衰退していく現状につ

いて、近代の教育制度の根幹である「教授要目」「学習指導要領」の記述内容の変遷に基づきながら確認する作業を行った。

〔注〕

- (1) 『世界大百科事典』「暗誦」の項目による。平凡社 一九七二年
- (2) 高瀬代次郎『佐藤一齋と其門人』大正十一年 大衆書房 四四ページ
- (3) 中山久四郎「林家と文教」『近世日本の儒学』岩波書店 昭和十四年 九〇ページ
- (4) 近藤正治「聖堂と昌平坂学問所」『近世日本の儒学』岩波書店 昭和十四年 二二三ページ
- (5) 高瀬代次郎『佐藤一齋と其門人』大正十一年 大衆書房
- (6) 神辺靖光『日本における中学校形成史の研究（明治初期編）』多賀出版
- (7) 『佐藤一齋全集』第一巻 明德出版社 平成二年 二七ページ
- (8) 『佐藤一齋全集』第一巻 明德出版社 平成二年 二五九ページ
- (9) 『佐藤一齋全集』第一巻 明德出版社 平成二年 二八ページ
- (10) 高瀬代次郎『佐藤一齋と其門人』大正十一年 大衆書房 四六一ページ
- (11) 高瀬代次郎『佐藤一齋と其門人』大正十一年 大衆書房 三九九ページ
- (12) 増渕恒吉『国語教育史資料』（東京法令出版 昭和五十六年）の第五巻・教育課程史の「概説」の項目に、次のようにある。

明治六（一八七三）年五月一九日に「小学教則改正」が布達され概表もまた改められたが、その表には師範学校編集の教科書も掲げられている。なお、同年一月六日の文部省布達で、「小学教則」中の時限欄に「字」とあるのをすべて「時」に改めた。